

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月11日現在

機関番号：62618

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2012

課題番号：22320099

研究課題名（和文）学習者の日本語運用に対する日本人評価の類型化・モデル化に関する研究
 研究課題名（英文）Research on the classification and modeling of Japanese native speakers' evaluations of non-native speakers' linguistic performance

研究代表者

宇佐美 洋（USAMI YO）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・日本語教育研究・情報センター・
 准教授

研究者番号：40293245

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、他者の言語運用に接しそれを評価する際の認知プロセスを、特に評価者の個別性に着目して分析することであった。評価プロセスは一見極めて多様であったが、質的な分析を進めることにより、評価の個別性の中に普遍性を見出すことができ、それを「評価プロセスモデル」の形で表現した。また、他者の言語運用を評価する際の自分の認知プロセスを内省するための「評価ワークショップ」開催手法を開発し、実施した。

研究成果の概要（英文）：

This study investigated the cognitive process that takes place when a person evaluates other people's linguistic performance, focusing on the evaluator's personality. Although individual evaluators' evaluation processes were found to be extremely diverse, the qualitative analysis indicated a certain "universality" among the diversity. This universality was identified as an "evaluation process model." Additionally, a method for holding an "Evaluation Workshop", the purpose of which would be to reflect on participants' own cognitive process when evaluating other people's linguistic performance, was developed and tested.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	6,600,000	1,980,000	8,580,000
2011年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2012年度	1,800,000	540,000	2,340,000
年度			
年度			
総計	10,600,000	3,180,000	13,780,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：異文化理解・異文化コミュニケーション・日本人評価・評価スキーマ・評価観点

1. 研究開始当初の背景

近年、日本国内で生活する外国人の増加に伴い、日本人と外国人が日本語を用いてコミュニケーションを行う機会も増加している。そのような中で、外国人の日本語運用が、日本語教育には特に関わった経験の

ない「一般日本人」によってどのように評価されているのか、解明する必要がある。

小林(2004)等においては、「日本人評価」のあり方を調査することによって、日本語教育におけるより効率的なシラバスを構築するということが目指されている。つまり、

日本語の学習項目のうち、「そこで間違ふことによって一般日本人の評価を著しく下げてしまう項目」はシラバスにおいて重視し、「間違えても評価をあまり下げない項目」については重視しないことにする、ということである。

こうした試みには大きな意義があると思われる反面、2つの留意すべき点がある。第1に、同じ「一般日本人」であっても、その評価の基準やプロセスは人によって大きく異なっており、それを平均的に扱ってしまうことは危険である、ということ。第2に、「日本人評価」のあり方に基づいてシラバスを作成するという事は、「日本人から低い評価を受けないようにする」ということを日本語教育の目標として設定してしまうことになりかねないこと、である。コミュニケーションとは双方向的なものであり、参加者双方が（つまり日本人・外国人の双方が）コミュニケーションの成立に対し努力を行う責任がある。「日本人評価」の研究は、外国人に対し一種の「学習目標」を提示するだけでなく、日本人に対しても、自らの評価のあり方に対し自覚と問い直しを促すものでなければならない。

※小林ミナ (2004)『日本人は何に注目して外国人の日本語運用を評価するか』平成12年度～平成15年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(2)研究成果報告書

2. 研究の目的

本科学研究費研究は、外国人の日本語運用(書きことば・話しことばの両面を含む)が一般の日本人によってどのように評価されているか、ということ、を、集団の平均値ではなく個人の多様性に注目して、また評価の結果だけでなくそのプロセスにも注目して、多様な観点からの分析を進めることを目的とする(当初計画では日本人評価を主たる分析の対象とする予定であったが、「コミュニケーションとは相互行為である」という基本理念に立ち、日本人の言語運用に対する外国人側からの評価も調査の対象に含めることとした)。

さらに、上記のような研究により得られた知見を生かし、「評価ワークショップ」の開催技法を開発し、実施する。

この「評価ワークショップ」とは、参加者が、自らがどのような価値観に基づいて、またどのようなプロセスによって外国人の日本語運用を評価しているか、ということの自覚を促すことを第一の目標とする。さらに、他者の評価のあり方と自分のそれとを比較することにより、自分の評価のあり方はこれでよいか、という問い直しを促していくことをその先の目標としている。

3. 研究の方法

(1) 評価対象データの収集

まず、評価対象とする対話データの収集・録画を行った。東京都・静岡県内の日本語学校・ボランティア日本語支援教室に通う日本語非母語話者(以下NNS)と、その学習者とは直接の面識がない日本語母語話者(以下JNS)で1対1のペアを作り、そのペアに、当方が作成した状況設定に沿ったロールプレイング(状況設定は「雑談」および「交渉」)の実施を依頼した。ロールプレイングの録画には2台のビデオカメラを使用し、1台でNNS側を、もう1台でJNS側を撮影することとした。画面にはひとりだけが映るようにし、その対話相手は声のみ録音され、姿は映らないようにした。

(2) ビデオ録画による評価調査

(1)で収集したビデオ録画の中から、「雑談」「交渉」両場面から、NNS発話、JNS発話をそれぞれ5組ずつ、偏りが出ないように抽出し、NNS発話をJNSによる評価実態調査の、JNS発話をNNSによる評価実態調査の材料として使用することとした。

① JNS 評価についての量的調査

雑談5編、交渉5編のビデオ録画を、JNS92名に視聴してもらい、「いちばん感じがよかったもの」から「感じがよくなかったもの」まで順位付けを依頼した。そのうえで、順位付けの際に想定される評価観点の一覧を示し、「どの観点をどの程度重視したか」についての質問紙調査を実施した。その結果は因子分析・クラスター分析にかけ、重視した評価観点の種類によって評価者グルーピングを行った。

② JNS 評価についての質的調査

①のグルーピングに基づいて偏りなく調査協力者を選出し、ひとりずつに対し再度外国人発話のビデオ録画を視聴してもらって、話し手に対しどのような印象を持ったか、特にどのような点に着目したか、などについてのインタビュー調査を実施した。

③NNS 評価についての質的調査

NNSについては大量の調査者に対し量的調査を実施することは困難であったため、中級・上級レベルのNNSを、性別・国籍等ができるだけ偏らないように選定し、2-2と同様の手順に基づくインタビュー調査を実施した。

(3) 対話当事者としての評価調査

調査(2)においては、評価者は対話には直接参加せず、自分とは直接関わりのない人々が対話している模様を第三者として視聴し、評価を行っていた。しかし現実の社会生活にお

いて、そのような評価を行う機会はあまり多くない。自分の言語行動が相手の言語行動に影響を及ぼし、それによって他者に対する評価が変化することもあり得るため、「対話当事者」としてどのような評価を行うかについても調査を行う必要があった。

そこで、初対面の JNS および NNS に、こちらが設定した課題に基づいて対話を行ってもらったあと、「相手の発話についてどういう印象を持ったか」「発話するとき、自分としてはどのような工夫をしたか」、などについてのインタビュー調査を行った。

(4) 「評価ワークショップ」開催手法の開発と、ワークショッププロセスの分析

個々の JNS が、どのような価値観に基づいて、またどのようなプロセスによって NNS の言語運用を評価しているかを内省することを目的とする「評価ワークショップ」を企画し、試行した。「評価ワークショップ」の開催手順は以下の通りである。

- 1) ある状況設定に基づき、NNS が日本語で書いた文章を複数編準備する。
- 2) その文章を JNS に読んでもらい、「いちばん感じがいいもの」から「感じがよくないもの」まで順位付けをしてもらう。
- 3) 4~6 名程度のグループ内で、付けた順位の照合を行い、順位にどのようなばらつきがあるかを確認する。そのうえで、各自が個々の文章について、どのような理由によりどのような評価を行ったかについて説明しあう。

話し合いの過程は許可を得て録音し、個々の参加者の間にどのような相互行為が行われていたかを分析するための材料とした。

4. 研究成果

(1) 評価プロセスのモデル化

話しことばに対する評価データ以前に収集した、NNS の書きことばに対する JNS の評価データを質的に検討することにより、一見極めて多様に見える評価プロセスの中にある種の普遍性を見出し、それを「評価プロセスモデル」として理論化した。このモデルは、今後「評価ワークショップ」などを構成していくための理論的支柱として極めて重要な役割を果たすものと考えられる。

(2) 発話評価観点の量的分析

NSS の日本語発話を JNS が評価する際、どのような観点をを用い、それぞれの観点をどの程度重視しているかということを質問紙によって調査し、その結果を統計的に解析した。言語表現の適切さのほか、親しみやすさ、非言語的要因、などの因子が挙げられ、かつ各因子が、「日本語の上手さ」をどの程度予測できるかを重回帰分析によって検討した。

(3) 発話評価プロセスの質的分析

NSS の日本語発話を JNS が評価する場合、JNS の日本語発話を NNS が評価する場合のプロセスについて、質的な手法により多角的に検討した。

NSS の発話を JNS が評価する場合、発話に対する全体的な印象は、必ずしも部分印象の積み重ねによっては形成されないこと、しかし「対人配慮（特に「今後の人間関係の維持」についての言及）」があると、そこに対する部分評価は全体評価にも影響を及ぼしやすいくちなどがわかった。

また JNS の発話を NNS が評価する場合、JNS は NSS にも分かりやすくするために様々な工夫を行っていたが、NSS はそうした工夫をありがたいと思う一方、子ども扱いされているようにも感じるといった相反的な評価を持ち得ることが明らかにされた。また JNS が交渉時にとる遠回しなストラテジーも、評価者によって「優しい」というプラス評価がなされたり、「イライラする」というマイナス評価がなされたりし得ることが示された。

こうした詳細な分析により、量的分析だけでは見えなかった、評価における細やかな意識の揺らぎが明らかにされつつある。

(4) 「評価ワークショップ」の実践と改善

JNS を対象に実施した「評価ワークショップ」でのやり取りを録音・分析し、ワークショップの開催手法の改善方法を検討した。

全体として参加者は、他者が自分とは全く異なる評価観点を持っていたことに気づいた際、そこで論争や対立を引き起こすのではなく、むしろ違いの発見をおもしろがり、肯定的に受け止めていることがうかがえた。

一方参加者の中には、JNS としての特権的な立場から一方的に NNS の日本語運用を批判するにとどまり、自らの評価価値観を内省するには到らないものも見受けられた。今後は、一方的に評価を行うだけでなく、自らの言語運用が他者からどう評価されているか、というような多角的な視点を、ワークショップの中に取り入れていく必要があることが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

- (1) 宇佐美洋・田中真理・徳井厚子「評価の「個人差」に着目することの意味—より深い自己認識につなげるための評価論—」、『ヨーロッパ日本語教育』, 査読無, 2012, 16, 36-50.
- (2) 野原ゆかり「日本語学習者の発話に対

する印象形成過程についての一考察－部分的な印象と全体的な印象の関係に注目して－, 『ヨーロッパ日本語教育』, 査読無, 2012, 16, 184-188.

- (3) 宇佐美洋「日本語学習者の書いた謝罪文に対する日本語教師の評価態度－質的分析によるその多様性の解明－」, 『フランス日本語教育』, 査読無, 2011, 6, 99-106.
- (4) 宇佐美洋「生涯学習的立場からみた評価」, 『AJALT』, 査読無, 2011, 34, 42-45.
- (5) 宇佐美洋「文章の評価観点に基づく評価者グルーピングの試み－学習者が書いた日本語手紙文を対象として－」, 『日本語教育』, 査読有, 2010, 147, 112-118.

〔学会発表〕(計 16 件)

- (1) 宇佐美洋「自らの評価価値観を内省するための活動－評価の個別性を尊重するところから始まる新しい教育観－」, 口頭発表, 第 17 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム, 2013.9. (発表確定), マドリッド・コンプルテンセ大学, スペイン
- (2) 宇佐美洋「無意識の「統制」を乗り越えるために－外国人の日本語に対する母語話者からの評価をきっかけとして－」, 青山学院女子短期大学総合文化研究所 研究プロジェクト「近代社会における統制と共生－日本・韓国・沖縄－」2012 年度 第 3 回講演会(招待講演), 2013.3.19, 青山学院女子短期大学
- (3) 宇佐美洋「「コミュニケーション」における評価－言語形式の連鎖」としてのコミュニケーション観を問直す－」, 国立国語研究所 日本語教育研究・情報センター 公開研究発表会, 2013.1.6, 国立国語研究所
- (4) 野原ゆかり「接触場面のやりとりに対する非母語話者側の評価－場面の当事者としての振り返りから－」, ポスター発表, 日本語教育学会 2012 年度秋季大会, 2012.10.14, 北海学園大学
- (5) 野原ゆかり「接触場面における当事者評価－ロールプレイ参加者の振り返りから－」, 口頭発表, 言語管理研究会第 28 回定例研究会, 2012.9.29, 千葉大学
- (6) 宇佐美洋「自己と向き合うための評価研究－個人の能力を伸ばす教育から, コミュニティ全体のパフォーマンスを向上させる教育へ－」, 口頭発表, 言語管理研究会 第 28 回定例研究会, 2012.9.29, 千葉大学
- (7) 宇佐美洋「「評価プロセス」の普遍性と個別性を探る－「学習者の書いた謝罪文」を題材として－」, ポスター発表,

2012 年日本語教育学会国際研究大会, 2012.8.18, 名古屋大学

- (8) 野原ゆかり「接触場面のロールプレイ会話に対する第三者の印象形成」, ポスター発表, 国立国語研究所 日本語教育研究・情報センター 公開シンポジウム「多文化共生社会におけるコミュニケーションとその教育」, 2012.2.18, 国立国語研究所
- (9) 宇佐美洋「謝罪文に対する評価プロセスのモデル化の試み」, ポスター発表, 国立国語研究所 日本語教育研究・情報センター 公開シンポジウム「多文化共生社会におけるコミュニケーションとその教育」, 2012.2.18, 国立国語研究所
- (10) 吉田さち「日本語学習者の発話に対する母語話者の評価－ロールプレイ視聴後の自由記述の分析から－」, 口頭発表, 日本語教育学会 2011 年秋季大会, 2011.10.9, 米子コンベンションセンター
- (11) 野原ゆかり「接触場面での日本語非母語話者の話しぶりに対する母語話者の評価－印象形成の要因を探る量的調査－」, 口頭発表, 社会言語科学会第 28 回大会, 2011.9.17, 龍谷大学
- (12) 野原ゆかり「日本語学習者の発話に対する印象形成過程についての一考察－部分的な印象と全体的な印象の関係に注目して－」, 口頭発表, The 13th International Conference of EAJS, 2011.8.27, Tallinn University, Estonia
- (13) 宇佐美洋・田中真理・徳井厚子「評価の「個人差」に着目することの意味－より深い自己認識につなげるための評価論－」, パネル発表, The 13th International Conference of EAJS, 2011.8.27, Tallinn University, Estonia
- (14) 宇佐美洋・近藤彩・内海由美子・早野恵子「教室外の世界で行われている「評価」－その多様性を探る意義－」, パネル発表, 日本語教育学会 2011 年度春季大会, 2011.5.21, 東京国際大学
- (15) 野原ゆかり「接触場面における会話参加者の言語運用に対する意識；母語話者と非母語話者による交渉場面において」, 口頭発表, 第 7 回日本語実用言語学国際会議 (Seventh International Conference on Practical Linguistics of Japanese), 2011.3.6., San Francisco State University, USA
- (16) 宇佐美洋・森篤嗣・野原ゆかり・吉田さち(2011)「外国人の日本語話しことばに対する日本人評価の多様性を探る」, 口頭発表, 第 7 回日本語実用言語学国際会議 (Seventh International Conference on Practical Linguistics of

Japanese), 2011.3.5, San Francisco
State University, USA

[その他]

ホームページ等

<http://jpforlife.jp>

6. 研究組織

(1)研究代表者

宇佐美 洋 (USAMI YO)

国立国語研究所 日本語教育研究・情報センター 准教授

研究者番号：40293245

(2)研究分担者

金田 智子 (KANEDA TOMOKO)

学習院大学 文学部 教授

研究者番号：50304457

田中 真理 (TANAKA MARI)

名古屋外国語学部 外国語学部 教授

研究者番号：20217079

富谷 玲子 (TOMIYA REIKO)

神奈川大学 外国語学部 准教授

研究者番号：40386818(2012年度まで)

福永 由佳 (FUKUNAGA YUKA)

国立国語研究所 日本語教育研究・情報センター 研究員

研究者番号：40311146

森 篤嗣 (MORI ATSUSHI)

帝塚山大学 現代生活学部 准教授

研究者番号：30407209

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

李 奎台 (LEE KYUTAE)

国立国語研究所 日本語教育研究・情報センター 技術補佐員

工藤 育子 (KUDO IKUKO)

国立国語研究所 日本語教育研究・情報センター プロジェクト奨励研究員

野原 ゆかり (NOHARA YUKARI)

国立国語研究所 日本語教育研究・情報センター プロジェクト奨励研究員

吉田 さち (HOSHIDA SACHI)

国立国語研究所 日本語教育研究・情報センター 非常勤研究員 (2012年9月まで)